

## 情 報

2007年（平成19年）

### 平成19年度一般教養科目「ボランティア」 について

歯科技工士学科 中澤 孝敏

#### 1. はじめに

歯科技工士学科教育課程に組み入れられたボランティア活動も中澤・佐々木の指導のもとで2年目を迎え、歯科技工士学科生体技工専攻2年生1名と歯科技工士学科1年生22名の計23名が選択した。

思いやる心を育成し、人間関係の大切さを理解することを授業科目概要とするとともに、ボランティアの体験が人間形成の指針となり、創造の原動力となることを学習目標とした。

#### 2. 平成19年度におけるボランティア活動の概要は以下の通りである。

##### 1) 「歯の健康と相談会」(上越歯科医師会主催、上越市民プラザ、6月3日)

歯科技工士コーナーでは上越支部の方が「歯科技工士ってどんなことをするの?」など、仕事の紹介や入れ歯の作り方の技術の紹介などがされた。参加学生は1名で技工材料の運搬、技工コーナーの展示の準備、来場者の対応や後片付けなどの軽作業を担当した。

##### 2) 「むし歯予防週間公衆衛生事業」(新発田市歯科医師会主催、生涯学習センター、6月9日)

手型模型の作製は6年目を迎え、明倫短大生の手伝いがなくてはならない状況であった。一日を通して男子4名が石膏練りを行い、女子6名はアルジネート印象材練りを行いながら、240名の手型模型を完成した。技工士会の方から作業の手際よさを褒められた。

##### 3) 「歯の健康フェア」(新潟市歯科医師会主催、三越新潟店、6月10日)

ボランティア選択者全員が参加し、沢山の来場者でにぎわうなか、245名の手型模型作製等に協力し、子供の手の印象採りや印象材練り、石膏注入や取り出し、受付も含めて最後に手型模型を来場者に手渡しするまでを担当した。新潟県歯科技工士会新潟支部長から感謝の言葉があった。

##### 4) 「災害救援ボランティア入門講座」(新潟市社会福祉協議会主催、新潟市総合福祉会館、6月23日・7月1日)

災害救援ボランティア活動において、1日目は災害直後のシュミレーション実習や災害ボランティアに駆けつけるための演習を学生1名が体験した。2日目は

緊急時における応急手当の訓練があり、日赤の指導で非常時の炊き出し訓練の実習や非常食の会食、ボランティア登録から活動終了までの流れを学生が体験した。

##### 5) 「サマースクール2007」(「新潟県中途視覚障がい者のリハビリテーションを推進する会」特定非営利活動法人障害者自立支援センターオアシス主催、新潟市総合福祉会館、7月29日)

学生5名は視覚障がい者についての講演をきいたあと実際にペアを組んでの誘導歩行実技体験を行った。

##### 6) 「夏休みプチボラ体験」(新潟市社会福祉協議会主催、新潟市総合福祉会館、8月20日～21日)

肢体障がい、視覚障がいの方からの生活しやすい街づくりの必要性を訴える講話をうかがったあと、学生は車いすを実際に押す体験をし、視覚障がい者のサポート実習ではアイマスクをつけて福祉会館内を歩いた。さらに手話講座に参加したほか、また街の歩道の段差や公衆トイレなどの点検も学生が自ら体験した。

##### 7) 「ボランティアガイダンス～はじめの一步～」(新潟市社会福祉協議会主催、新潟市総合福祉会館、8月28日)

参加した学生は7名で、ボランティア活動の講話、車椅子介助法、ミニ手話講座、視覚障がい者誘導法は「夏休みプチボラ体験」と同じ内容を集約した体験であった。

##### 8) 「あたご祭」(社会福祉法人 愛宕福祉会主催、特別養護老人ホーム 愛宕の園、9月1日)

介助補助、模擬店補助、催し物補助等のボランティアを学生14名が担当した。特にお年寄りとのコミュニケーションが難しく苦勞したが、また「ボランティアガイダンス～はじめの一步」で学んだ車椅子の動かし方を活用、喫茶店の係では他校の人との交流もできた。

##### 9) 「新潟市障がい者大運動会」(新潟市主催、新潟市陸上競技場、9月1日)

障がい者大運動会の会場設営、各種競技の手伝い、障がいのある方への競技中のサポート等を学生2名が体験し、競技にも積極的に参加した。

##### 10) 「新潟県視覚障害者福祉大会2007」(新潟市社会福祉協議会主催、新潟市総合福祉会館、10月6日～7日)

学生9名が会場設営と会場撤去を手伝ったが、会場に敷くシートや椅子・机などが重く力仕事で大変だったが、他の参加者との助けあいも経験した。

##### 11) 「災害救援ボランティアリーダー養成研修会」(新潟市社会福祉協議会主催、新潟市総合福祉会館、10月8日)

## 情 報



図1 新発田市 生涯学習センターにて手型模型作製を行う



図2 新潟市 総合福祉会館にて災害救援ボランティアでAEDの講習



図3 新潟市 陸上競技場にて障がい者大運動会のサポート



図4 新潟市 特別養護老人ホームにて愛宕まつりでお年寄りと語る

被災者主体のボランティアセンターのあり方、災害ボランティアリーダーの役割を学生1名が学習した。「新潟県中越沖地震における柏崎と刈羽の災害ボランティアセンターから学ぶ」ことについての講義を受けたほか、災害ボランティア活動者の体験談、スタッフ役・ボランティア役になり活動前オリエンテーションの体験を熱心に取り組んだ。

- 12) 「歯科健康フェア」(五泉市阿賀町歯科医師会主催。アピタ新潟亀田店。10月14日)

新発田・新潟三越会場の行事と同じく手型模型の製作を学生2名が担当した。学生は業者の方が専用機で印象材を練和する能率の良さに興味を持ち、技工士会の方の効率のよい作業に感心していた。

- 13) 「鯉のタタキ 食する会」(社会福祉法人 愛宕福祉会主催。身体障害者療護施設 松潟の園。10月28日)  
学生2名が調理の準備手伝い、施設利用者さんの介

助、後片付け等を体験した。お年寄りから調理の指導があり、身体に障がいがあることの大変さを学生は身をもって感じていた。

- 14) 「ボランティアのつどい2007」(新潟市社会福祉協議会主催。新潟市総合福祉会館。11月18日)

学生9名が『園芸福祉の魅力と可能性～植物と接して、仲間をつくり、みんなで幸せになろう～』の講演を受講した後に、3分科会にわかれた。「救急法」ではAEDの講習会と人工呼吸や心臓マッサージ、「おもちゃライブラリー」では子供のためのおもちゃ作り、「環境にやさしい生活」では簡単にできる節約や省エネ等を体験した。

3. ボランティア活動を行った学生は以下のような感想を持った。

- ・視覚障がい者の大変さがわかり、今後に活かしていきたい。

## 情 報

- ・障がい者の方が困っていたら思い切って声をかけた  
い。
- ・ボランティアは自分も楽しく取り組むことが大事だと  
教わった。
- ・障がい者の方も積極的に外に出られるような環境作り  
が必要と思う。
- ・人との接し方の大切さと難しさを体感した。
- ・挨拶がその場の雰囲気を変える体験をした。
- ・少しでも人の役に立つことを喜びとして活かしてい  
きたい。
- ・AEDの講習を受けたことにより、操作できる自信に  
繋がった。

#### 4. まとめ

ボランティアを選択した学生は間違いなく人間的に成長し、人と人との繋がりを豊かに形成し、より地域社会に適応できる素質を身につけたことと思われた。遊びたい盛りの若者が、貴重な休日を削って参加したボランティア活動で、得た知識や体験は知らず知らず身につけていて、必ずやどこかで生かされるであろう。ボランティアとの出会いによって自然体で楽しく行動が起これるように、自分が変われば、まわりの見る目も変わる。明日はわからないが、学生諸君には「今」を大切に活躍して欲しいと思う。

## 野村研究室プレゼンテーション抄録

平成15年4月4日日本学1号館3階の一角にある研究室から発信した「野村研究室プレゼンテーション」の目的は教員の臨床研究をより身近なものとするのであった。参加した教員の研究活動は年々充実し、明倫短期大学学会をはじめとして、日本歯科技工学会、各専門学会で研究成果を報告し、論文を投稿するまでに至った。最近では、専攻科生体技工専攻生や研究生の臨床研究ゼミの発表の場としての役割もあり、多くの教員や若き歯科技工士の活動がその機能を充実させている。さらに、新潟大学の研究者や本学に関連の深い企業の参画により、フィールドが益々広がってきた。本稿では平成19年度内に開催されたプレゼンテーションの抄録を紹介する。さらに、平成15年4月から平成19年11月までの約5年間で発表総数が53テーマ、参加延べ人数が550名を超えたことを踏まえて、発表者とテーマおよび参加者の内訳を表にまとめた。これが教員、専攻生、学科生、専攻科修了生、学外の歯科技工士や研究者などの多くの参加者により支援された活動記録と考えている。

歯科技工士学科 野村章子, 丸山 満

第40回：平成19年5月24日

### 部分床義歯を製作して学んだこと

歯科技工士学科専攻科 生体技工専攻8回生

山崎 七恵

患者は85歳女性で、屈曲鉤を用いた義歯の不適合により床内面に食渣が入り込む、口蓋隆起に床後縁が当たり痛むと訴えていた。そこで、義歯の適合性すなわち維持と安定を考慮した義歯設計に際して、維持・支持・把持機能に優れ、変形しない鑄造鉤を採用した。さらに、粘膜支持域の拡大を目的として、上顎義歯は患者が痛みを訴えていた口蓋隆起を十分に避け、最後臼歯の遠心まで床後縁を延長し、下顎義歯はレトロモラーパットを覆う形態とした。また、維持装置と床を移行的にすることにより舌感と清掃性の向上を図った。

本症例を通して、維持装置の選択と粘膜支持域の拡大が義歯の維持安定に関与する技工理論を理解することができた。